

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03116

研究課題名(和文) うたごえ運動の歴史学的研究

研究課題名(英文) Historical Study of Utageo Movement

研究代表者

河西 秀哉 (KAWANISHI, Hideya)

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：20402810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本社会のなかで、うたは大きな力を有した。特に、うたごえ運動と呼ばれる運動は、社会運動の高揚にともなって、大きく発展した。本研究は、そのうたごえ運動の実態を史料に基づき、明らかにしたものである。

この運動は、一見するとその方向性が異なる戦前の厚生運動とも連続性を有していた。一方で、戦後特有の意義付けも存在していた。たとえば、地域の独自性が重要視されており、沖縄返還にも積極的に取り組んだ。うたを通じて、社会と接点を持つようとしていたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本社会のなかで、うたごえ運動は大きな役割を果たした。社会運動が盛んななかで、その運動を高揚させる役割を有した。それだけではなく、地域の文化的な役割をも担うこともあった。それまでうたに関わっていなかったような人々が、自身の生活などに密着するものとして、うたごえ運動に取り組んでいくこともあった。

このようなうたごえ運動の意味を明らかにすることで、社会にとって歌とは何か、人間生活における音楽の意味をも提起することができたと考える。

研究成果の概要(英文)： Song had great power in Japanese society after the World War II. In particular, the Utageo Movement developed greatly with the rise of social movements. This study clarifies the actual condition of the Utageo movement based on historical materials.

This movement had continuity with the pre-war welfare movement whose direction was different at a glance. On the other hand, there was a significance peculiar to the postwar period. For example, the movement emphasized the uniqueness of the region. And in the Utageo Movement, they actively worked on the return of Okinawa. They were trying to make contact with society through songs.

研究分野：日本近現代史

キーワード：うたごえ運動 合唱 戦後日本 社会運動 労音

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦後日本において、多くの人々が参加したうたごえ運動という運動がある(現在も継続している)。職場や地域などで人々が集まり、一緒になって歌を歌った。そうした合唱活動のなかでも、特にうたごえ運動と呼ばれる運動があった。歌に自らの主張を乗せながら連帯し、その運動を展開していた。このうたごえ運動は1948年ごろから始まり、次第に人々へと浸透していく。1950年代から60年代にかけては、当時高揚した社会運動と結びつき、運動は発展した。そうして、全国的な新聞にもうたごえ運動についての記事が多数掲載され、その性格をめぐる論争まで起きた。戦後日本社会のありようを考察する上で、重要な運動の一つと思われる。

近年、このうたごえ運動の研究が盛んである。それらは、およそ三点の傾向からなる。

第一に、音楽史の関心から、うたごえ運動全般を検討し、その意味を解明しようとしたものである。そのなかで、最も網羅的かつ体系的にうたごえ運動を検討し、それを総体として把握したのが長木誠司の研究である(「運動(ムーブマン)」としての戦後音楽史1945～」9～14、『レコード芸術』第53巻9号～第54巻2号、2004～2005年、後に長木誠司『戦後の音楽』作品社、2010年に収録)。それまで、音楽史のなかでうたごえ運動が本格的に研究されることはほとんどなかった。その理由として、うたごえ運動の担い手の多くがアマチュアであり、運動が政治的・社会的背景を有していたことから、職業的音楽家の検討を中心とした音楽史の分野ではなじまなかったことが考えられる。それに対して長木の研究は、戦後音楽史を社会的な背景とともに捉えることを目的としており、そのなかでうたごえ運動を検討してその意味を考察したものであった。音楽学からは他に、甫出頼之が初期のうたごえ運動の歴史的展開をコンパクトにまとめており(「うたごえ運動の歴史的展開」『エリザベト音楽大学研究紀要』22号、2002年)近年になって敗戦後の日本の音楽史のなかでのうたごえ運動の重要性が強調され始めている。

第二に、歴史学・思想史のなかからうたごえ運動を検討した研究である。こうした研究は、具体的な団体・地域のうたごえ運動を取り上げ、検討対象としている。サークルに集う労働者の意識を解明する一つとして国鉄のうたごえ運動を取り上げた三輪泰史(「紡績労働者の人間関係と社会意識」『歴史学研究』833号、2007年、後に三輪泰史『日本労働運動史序説』校倉書房、2009年に所収)1950年代の九州・北海道の炭鉱労働者によるうたごえ運動を取り上げた水溜真由美(「1950年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」『北海道大学文学研究科紀要』第126号、後に水溜真由美『『サークル村』と森崎和江』ナカニシヤ出版、2013年に所収)1958年の王子製紙争議(北海道・愛知)とうたごえ運動の関係性を論じた岸伸子(「王子争議をうたごえ運動とともに」『女性史研究ほっかいどう』第3号、2008年)「竹田の子守歌」の歌われ方を通して1960年代の京都におけるうたごえ運動の展開過程を解明した武島良成(「『竹田の子守歌』の文脈」『部落問題研究』203号、2013年)など、史料や聞き取りを駆使した実証的で優れた研究が多い。こうした研究が近年に出てきた背景には、社会運動史の再検討という歴史学の課題がある。従来の社会運動史研究がハードの側面に焦点を当てていたのに対し、近年の社会運動史はその担い手の意識といったソフトの側面に注目されることが多いからだと思われる。

そして、社会運動史のなかで取り組まれた文化的な活動の一つとしてうたごえ運動が検討され、担い手の意識が解明されるようになったのである。その結果、なぜ人々はうたごえ運動というサークル活動に参加したのか、明らかになりつつある。

第三に、うたごえ運動のなかでも特に1950年代後半を中心的な課題とし、その時代像とともに把握する研究である。門奈由子の研究は、1955年に日本のうたごえ実行委員会が創刊した『うたごえ新聞』を史料として、当該期のうたごえ運動についての解明を試みた(「1950年代後半の『うたごえ運動』」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第18号、2012年)。また、昭和

30年代の民謡ブームとうたごえ運動の関係性について検討した寺田真由美(「うたごえ運動における民謡の意義」『表現文化研究』第3巻第1号、2003年。)や輪島裕介(「三橋美智也とうたごえ運動」細川周平編『民謡からみた世界音楽』ミネルヴァ書房、2012年)の研究は、うたごえ運動における日本民謡の重要性を明らかにしている。

以上のように、うたごえ運動の研究は近年、急速に進展している。一方で課題もある。

第一に、史料的な問題である。うたごえ運動を総体的に検討した研究は、後の編纂物や回想を主な史料として用いている。当該期の史料については、うたごえ運動で実際に使用された『青年歌集』を長木が用いた以外はほとんど利用されていない。後世になって書かれたものではなく、当該期の一次史料にあたって、うたごえ運動とは何かを明らかにする必要はあるだろう。

第二に、検討の対象が1950年代後半に重きが置かれている点である。これは、国立国会図書館などに所蔵されて一般的にアクセスできるうたごえ運動の機関紙『うたごえ新聞』が1955年に創刊されたことが大きい。それゆえ、これまでの研究は1950年代の検討に集中しており、それ以後のうたごえ運動の全容はまったくと言ってよいほど明らかにされていない。歴史学としてうたごえ運動を研究しているものがないのである。

2. 研究の目的

こうした研究状況に対して私は、一次史料に基づいて、うたごえ運動の発祥から発展する時期の解明を試みてきた(河西秀哉『うたごえの戦後史』2016年、人文書院)。そして、うたごえ運動の全国的組織である「日本のうたごえ全国協議会」が所蔵する、運動開始当初から1950年代の一次史料を調査し、そのなかから特に重要なもの(『うたごえ新聞』などの機関紙)については『「うたごえ」運動資料集』第一巻～第六巻(道場親信と共編、金沢文圃閣、2016年)としてまとめた。

しかし、資料集としてまとめたものの、運動開始当初から1950年代の一次史料に関する分析はすべて終わっているわけではない。例えば、うたごえ運動では参加者による討議が数多く開催され、その議事録などが残っているが、その分析は未だ行われていない。こうした史料の丹念な分析によって、当該期のうたごえ運動がどのように展開されていたのか、そして参加した人々はどのような意識を有していたのかわかると思われる。まずはこうした一次史料の調査・分析が重要であると考え、研究目的とした。

また、地域におけるうたごえ運動の活動状況についても、より詳しく検討する必要がある。うたごえ運動は、東京などだけではなく、地域においても積極的な活動を行っており、しかもそれぞれの地域が独自に運動を展開していたところにも特徴がある。その実態を明らかにすることも必要である。

そして、運動が盛んであった1960年代や次第に衰退に向かう70年代に関する検討もこれまでまったく手つかずの状態である。この一次史料の調査・分析を行い、これまで研究が進んできた時期以後のうたごえ運動について、明らかにすることも研究目的とした。

以上のように、うたごえ運動に関する研究は近年になって、急速に進んだものの、一次史料に基づいてなされた研究はほとんどない。その運動の全国的組織の資料を調査・分析することは、運動全体がどのような意味を持っていたのかを明らかにすることに繋がり、これまでの研究史ではないものである。また、これまで歴史学として検討されていなかった時期をも含めて検討することで、うたごえ運動の全容が明らかにできるものと思われる。

3. 研究の方法

まず、うたごえ運動に関する一次史料の分析を行った。演奏会パンフレット、機関紙である『合唱運動』や『うたごえ新聞』の記事の内容を詳細に検討し、うたごえ運動が全国でどのように展開されていたのかを明らかにした。また、参加者による討議が数多く開催されているのがうたごえ運動の特徴であるが、その議事録も一次史料のなかに多く残されていることを確認していたため、その分析を行い、参加者の意識を明らかにすることをを行った。

雑誌や新聞など、メディアに見られるうたごえ運動の分析も行った。一般の新聞や雑誌などにもうたごえ運動は取りあげられ、大きく論じられることがあった。まずはそうした記事を見つけ出し、分析することをを行った。そして、うたごえ運動側の史料との見方の異同を検討した。

次に、うたごえ運動参加者の意識をより明確にするため、指導者・参加者などから聞き取りを行った。特に注意して話をうたがった点は、第一に、うたごえ運動にどのように参加し始めたのか、どのような活動を行ったのかという点。第二に、そうした活動のなかで特に熱を持って取り組んだものは何かという点。第三に、参加者ではない人々との関係性、たとえばうたごえ運動に取り組んでいない合唱にたずさわる人々との関係など、である。こうした聞き取りによって、史料からはうかがい知ることができない問題、参加者により密接な問題を明らかにすることを目的とした。

第三に、うたごえ運動の周辺を明らかにすることも行った。勤労者音楽協会（労音）にはうたごえ運動にたずさわる人々との重複があるほか、強い関係性もある人々もいたことがわかった。また、労音の例会にはうたごえ運動が出演することもあり、そうした企画がいかに行われたのか、労音側の史料から検討することで、同時代のうたごえ運動のとらえ方を検討した。また、戦前の厚生運動との連続性 / 非連続性を検討するため、戦前史料の分析なども行った。

4．研究成果

本研究では、うたごえ運動に関する史料収集の対象範囲を、高度経済成長期のみならず、戦後直後から近年まで広げ、戦後全般にわたって行った。また、うたごえ運動の関連史料についても収集し、戦後全般にわたる「うた」に範囲を広げて行った。

そのなかで、第一に、関西や東海地域におけるうたごえ運動の実態を明らかにし、地域においてどのような展開があったのかに特に注目した。そのため、地域史料の収集と分析を行うとともに、積極的に関係者への聞き取りを実施した。その結果、中央（東京）と各地域のズレなどが明らかとなった。従来、東京のみの運動が取りあげられてきたが、関西や東海地方ではその影響は受けつつも、地域における独自の動きがあることが明らかになった。それは、その地域の特性や置かれた環境に大きく起因していた。また、関西という地域をとっても、大阪と京都、兵庫、奈良など各県においても違いがあることが明確となった。地域における差である。これは、うたごえ運動における特徴もあるように思われる。農村などの地域の人々が参加者として多い地域、大学生や高校生などの若い層が多い地域、また工場や会社などに勤める人々が多い地域などによって、それぞれの運動に特性が生じた。

第二に、うたごえ運動と沖縄との関係性も明らかとなった。うたごえ運動が本土復帰前の沖縄との関係性を強めていることを確認し、それに関する史料収集に努めた（たとえば、『うたごえ新聞』などの記事や討議資料など）。うたごえ運動においては「民族」の重要性が語られるが、そのなかで沖縄の歴史が注目され、それを基にした創作曲を盛んに作られた。また、うたごえ運動を沖縄に広げる活動やそれが定着していく過程も明らかとなった。うたごえ運動における沖縄の位置づけは非常に高く、「歌劇『沖縄』」の製作は、1960年代にうたごえ運動を活性化させ

る要因となった。

第三に、うたごえ運動と周辺運動との関係性があることも明らかとなった。戦後盛んであった勤労者音楽協議会(労音)との関係性については従来の研究でも若干ではあるが言及されてきたが、本研究では具体的にはどのような動きであったのかを、金沢労音の機関誌を検討するなかで、明らかにした。金沢労音は機関誌が1号からすべて保管されて閲覧できる状態にあり、地域労音の状況を知ることができる史料を有する。それによれば、例会でたびたびコーラスが取りあげられており、そのなかにうたごえ運動もあった。また、金沢における労音・うたごえ運動では、それぞれの中心人物が重なっており、それぞれが交流を重ねていた。

本研究では、うたごえ運動の広がりについても解明を試みた。戦前から続く合唱運動との繋がりと違いを明らかにするとともに、社会運動におけるうたごえ運動の位置づけなど、うたごえ運動単体ではなく、戦前からの文化運動の系譜のなかでどのように位置づけることができるのか、戦後の文化運動として総体的にとらえるにはどうしたらよいのかを含めて考察を重ねた。この点は今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 河西秀哉	4. 巻 707・708
2. 論文標題 1950年代うたごえ運動論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6. 最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://repo.lib.hosei.ac.jp/handle/10114/13635	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河西秀哉
2. 発表標題 うたごえ運動の展開過程とその影響
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会 第4回国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河西秀哉
2. 発表標題 関西におけるうたごえ運動の展開過程
3. 学会等名 同時代史学会関西研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 道場親信・河西秀哉	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 1036
3. 書名 「うたごえ」運動資料集 第4巻～第6巻	

1. 著者名 戸ノ下達也編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 未定
3. 書名 音楽文化の日本近現代史(仮)	

1. 著者名 戸ノ下達也編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 未定
3. 書名 展開された厚生音楽(仮)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----